

滿洲に『百萬圓天文臺』の計畫

天氣の好い滿洲が天文研究に好適であることは一昨年山本一清教授が東京の汎太平洋學術會議で唱導された所であるが、最近大連よりの新聞電報によれば、滿鐵を始め滿邦人一同の企てとして今回御大典記念の大天文臺が計畫され、去る一月24日の滿鐵重役會議には此の天文臺のため1500000圓の豫算案が通過した由。學界のため、又、邦人の文化向上のため此れほゞ有意義なニュースは無い。傳ふる所に據れば、此の天文臺は「30吋」屈折望遠鏡と「60吋」反射望遠鏡とを主體とするもので、世間では之れを、米國キルソン山に次ぐ「世界第二」の天文臺と稱してゐるが、吾人の見る所では之れは寧ろ第一流の天文臺と稱して好い。試みに現今世界に散在する「百萬圓天文臺」を擧げて見るこ、

名 稱	主 要 機 械		創 立
	反 射	屈 折	
米 國 キ ル ソ ン 山	100吋 60吋	—	1904年
同 ヤ ー キ ー ス	24吋	40吋	1897年
同 リ ク	36吋	36吋	1885年
加 奈 太 ヱ ク ト リ ア	72吋	—	1918年
獨 逸 ベ ル リ ン	49吋	25吋	1918年
同 ハ ム ブ ル グ	40吋	24吋	1914年
露 國 シ メ イ ス	40吋	41吋	1924年
東——洋——方——面——			
蘭 領 シ ャ バ	—	26吋(企)	?
東 京 (三 鷹)	—	26吋(企)	1924年
京 都 大 學	18吋 13吋	12吋	1910年
滿 洲 (豫 定)	60吋(企)	30吋(企)	?

現代の天文學界に屈折機と反射とが共に必要であることは言ふまでもないが、此の兩種を兼備してゐる天文台は今日の世界に尙ほ少ない。

之れで見ても此度の計畫が如何に世界的に雄大なものであるかが知れる。